

会議名	第1回「快適性に配慮した家畜の飼養管理に関する勉強会」
開催日時	平成18年8月10日(木) 13:30~16:30
開催場所	全国家電会館 1階会議室(東京都文京区湯島3-6-1)
主催者	社団法人 畜産技術協会
参加人数(概数)	約50名(委員10名、農水省・環境省関係官、主催者のほか、畜産技術協会がホームページで公募し、傍聴を許可した者)
1. 会議の概要 (議事内容の資料添付)	<p>農水省が18年度事業として公募、畜産技術協会が事業実施主体に応募して採択された事業で取り上げられた勉強会。</p> <p>アニマルウェルフェアについては近年EUはじめ国際的に関心がたかまり、国内的にも法規制の整備が行なわれようとしている。“動物愛護”は環境省の所管なので、畜産関連のアニマルウェルフェアを「快適性に配慮した家畜の飼養管理」と仮訳語して勉強会を開催し、外交・商売・同和問題などから予測される畜産への悪影響を未然に防ぐための情勢把握、情報収集・分析、飼養管理の課題の科学的整理、基本的な考え方の整理などを目的とし、事例調査、アンケート調査なども行い報告書にまとめ、HPなどにより公開する(主催者挨拶・配布資料より)。</p> <p>【議事】</p> <p>(1) 現状と課題(配布資料と参考資料による)</p> <p>1) アニマルウェルフェアをめぐる国内外の動きと問題点</p> <p>① EU理事会指令の概要</p> <p>② OIEガイドラインの概要</p> <p>③ 動物愛護管理法(産業動物の飼養および保管に関する基準)等</p> <p>2) アニマルウェルフェアに関する文献等</p> <p>(2) 我が国におけるアニマルウェルフェア(快適性に配慮した家畜の飼養管理等)の考え方について(意見交換。事例調査、アンケート調査、第2回委員会に向けての論点整理。)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・国内自給率の確保 ・国際化に対応した畜産業の育成 ・家畜衛生管理の徹底 ・管理者の安全性・作業性 ・改良されてきた家畜の特性 ・消費者への情報提供・食育 ・生産・消費・施策を統合した日本に合ったウェルフェアシステムの構築 ・学校(大学を含む)教育。指導者の育成 ・戦略的な大型予算の確保によるプロジェクト研究の推進 ・米国に関する情報の収集 ・民族の価値観、宗教観

<p>2. 今後の研究開発分野として重要と思われる関連発表課題・話題提供名</p>	<p>アニマルウェルフェア（快適性に配慮した家畜の飼養管理等）については我が国でも動物実験・実験動物の取り扱いと共にすでに十数年前から言われていたことであるが、畜産関係者がこの問題をできるだけ避けたい姿勢をとってきたこともあることを否めない。この間、動物愛護論者からの情報によりわが国の消費者の一部に畜産物に対する不安と不信の念を持たせてきた一方で、飼養ケージやEUの飼料添加物規制情報は生産者に不安と混乱を生じさせていることも事実である。</p> <p>しかし、我が国が食料自給率の向上を最優先課題としている一方で、EU諸国が畜産物輸出の国家戦略としてアニマルウェルフェアを採り上げようとしているとの見方もある現在、我が国の生産者をはじめ、すべての畜産関係者が避けて通れる問題ではなくなっている。</p> <p>快適性に配慮した家畜の飼養管理が家畜の生産性に悪影響を及ぼす筈がなく、問題は費用対効果と消費者が納得して高付加価値を認めてくれるかだけであろう。</p>
<p>3. その他の発表課題で関心のあったもの</p>	
<p>4. 今後研究開発課題採択に当たって参考とすべき事項等</p>	<p>分子生物学レベルの畜産技術開発研究では研究費の額が膨大なだけでなく、確実な成果が得られる確率も格段に低く、研究支援担当者を常に悩ませているところである。これに対し飼養管理関連技術開発の研究投資は、研究者と家畜の実験計画が一定のレベルに達していれば、それに応じた一定の成果が必ず得られるものである。</p> <p>アニマルウェルフェア（快適性に配慮した家畜の飼養管理等）問題で我が国が諸外国と対等に渡り合おうとするのであれば、それに見合った額の戦略的研究開発資金を早急に投入すべきであろう。</p>
<p>5. 会議の所感</p>	<p>学者・研究者、生産者、消費者、行政関係者をバランスよく配置した委員の構成は、委員会の進行を程よく緊張させ、今後のこの勉強会の進展が期待させられる。</p>
<p>報告者</p>	<p>針生 程吉</p>